26、法龍の使命

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、法龍程の仕合せ者が外にいるだろうか。よい両親を

持ちよい家庭を持ちよい子供を持って　物質にも恵まれ過ぎて何一つとして不足がない。此身に育て上げて下さる迄には　三世の諸仏を泣かせ、八千遍の苦労さし、永劫の御骨折りを掛けた事だろう。遠く宿縁を慶ばずにはいられない。この父を持ち、あの母を持ち、仏道に入らして頂き必死の勉強をさして頂き、発表も出来、表現も出来る。何と幸福なこの身だろう。三千世界を探しても二人といないこの身、尊いではないか、感謝せずにはいられない。怠慢は許されないぞ、堕落は出来ないぞ。

法龍には人の知らない使命が有る。人の真似の出来ない役目がある。

七百年の古に祖師聖人は当時の教会の紊乱堕落を慨いて、これならば釈尊の精神に悖るではないか、これでは弥陀の本願に背くではないかと、批難攻撃の中に破邪の利剣を振るわれたではないか。信の巻には

然るに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈みて浄土の真証を貶す、定散の自心に迷うて金剛の真心に昏し。乃至　誠に仏恩の深重なるを念じて人倫の弄言を恥じず、浄邦を忻ふ徒衆、穢域を厭ふ庶類、取捨を加ふと雖も毀謗を生ずること莫れとなり

と、化土巻には、

然るに濁世の群萠、穢悪の含識、乃至　九十五種の邪道を出でて半満権実の法門に入ると雖も、真なる者は甚だ以て難く、実なる者は甚だ以て稀なり、偽なる者は甚だ以て多く、虚なる者は甚だ以て滋し。と

又、化土巻の終りに

竊に以みれば聖道の諸教は行証久しく廃れ浄土の真宗は証道今旺なり。然るに諸寺の釈門教に昏くして真仮の門戸をしらず、洛都の儒林、行に迷ふて邪正の道路を辨ふることなし。

何と大胆不敵な暴言だろう。八家九宗の聖道門や、定散の自心に迷う浄土門の人達をぼろ糞に攻撃しているのは邪見ではないか。真仮の門戸を知らず、邪正の道路を辨うることなし、皆偽虚なる者であって　自分一人が真実の信仰であるぞとは何たる憍慢だろう。真宗門内の学者連は弁護して、あれは破邪顕正だと美しい名目を立てているが、それは我田引水だ。聖人以外の者から見れば　肉食妻帯をした堕落坊主よ、師匠

に背いた横着坊主よと排斥され、法然門下の十人の異安心の中の信一念の邪義の親玉であったのだ。而しそれが真実であったから　今光彩を発揮したのだ。

処が七百年後の今日では、浄土真宗も型に囚われて実を失い、政策を弄して信を喪い、名利に走って徳を欠き、酒色に溺れて毒を吐く、伽藍仏教の末路を呈示しているではないか。必死に成って真宗を復興せしめようと努力する者を異安心と攻撃し　己は無安心の殻に隠れて安眠し、本堂の鬼瓦が落ちたと言っては門徒にかぶりつき、子供が生れたと言っては信徒の物を剥ぎとる。生きている人間は生かし切らないで、葬式や法事で下り向きで酒を飲む。死んだ者のお蔭で食うて行くのだから　社会から捨てらるるのも当然ではないか。自ら法衣を脱いで腰弁で重労働やっているのが無安心の親玉だ。まだ昔の夢を捨てやらず　真宗門徒と威張っているが、新興宗教に押しまくられて青息吐息が判らないのか。真宗随一の地方でさえそれだもの、全国は推して知るべしだ。

「真なる者は甚だ以て難く、実なる者は甚だ以て稀なり、偽なる者は甚だ以て多く虚な

る者は甚だ以て滋し」やるぞ、やるぞ、法龍は最後の一人に成っても真宗の真宗たる唯信独達の法門を発揮して見せるぞ。本願寺を復興して見せるぞ。